

デイ・ウォッチ

2008(平成20)年1月31日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★



監督・共同脚本=ティムール・ベクマンベトフ/出演=コンスタンチン・ハベンスキー/マリア・ポロシナ/ウラジミール・メニシヨフ/ガリーナ・チューニナ/ヴィクトル・ヴェルズピツキー/ジャンナ・フリスケ/ディマ・マルティノフ (20世紀フォックス映画配給/2007年ロシア映画/131分)

……『ナイト・ウォッチ』(04年)に続く第2作『デイ・ウォッチ』は、ロシア映画史上 No. 1 記録を更新! その理由は斬新な映像技術だが、正直言っておじさんたちは少し疲れるかも……? 光の世界 vs. 闇の世界、ナイト・ウォッチ vs. デイ・ウォッチ、と物語は単純そうだが、俳優の名前と顔が容易に一致しないから意外に難解……? この映画は好きか嫌いかははっきり分かれるから、あなたのスタンスをしっかりと……。

第1作がロシアで大ヒットだが……

ティムール・ベクマンベトフ監督の『ナイト・ウォッチ』(04年)は近時ロシアでベストセラーとなっている、セルゲイ・ルキヤネンコ原作の『ナイト・ウォッチ』三部作を映画化した第1作。「光の世界」と「闇の世界」との対立を軸とし、特殊な能力を持った「異種(アザーズ)」の行動に焦点を当てた物語は、きわめてファンタスティックなものだが、この第1作がすごいのはなんといってもその映像で、『マトリックス』を超える映像革命と宣伝された。そしてこの映像革命によって、『ナイト・ウォッチ』は、ソ連崩壊以降に公開されたあらゆる映画の記録を破るメガヒットとなったらしい。

そんな『ナイト・ウォッチ』について私は、「ホントにこれがロシア映画……?」「ロシア文学の伝統は……?」と疑問を示し、「今ドキの若者はこういうのがお好みなのだろうが、私にはついていくのがしんどいというのが正直なところ」と評論し、星2つにとどめた(『シネマルーム10』86頁参照)。

まあ、簡単に言えば、この映画は私にはよくわからんし、観ていると疲れる、ということだ。

第2作は No.1 記録を更新！

プレスシートによれば、第2作の『デイ・ウォッチ』は第1作の『ナイト・ウォッチ』を上回り、「ロシア映画史上興行収入歴代 No.1 記録更新！」とのことだ。

最近視力の低下と、目の疲れを顕著におぼえている私には、スクリーンをじっと見ているのがしんどくなるほど、目まぐるしい視覚効果を駆使した映像だが、それは好き嫌いがはっきり分かれるはず。ハリウッドで『マトリックス』（99年）が大ヒットしたのは、若者たちの好みにマッチしたためだろうから、ロシアでも『ナイト・ウォッチ』や『デイ・ウォッチ』が主に若者たちに大ヒットしたのは当然かもしれない。しかし、団塊世代のおじさんには、この映画を観るのはホントに疲れるはず……？

ちなみにこのシリーズは第3作『ダスク・ウォッチ』で完結するが、それはアメリカとの合作になるらしい。アメリカとロシアが仲良くするのはいいことだが、この映画のテイストはハリウッド映画とは全く異質のもの。したがって、両者がうまく融合すればいいが、かえって中途半端になってしまうとヤバいと私は思うのだが……。

ヘタな解説より、前提条件を丸写し……

この映画は現代のモスクワが舞台だが、第1作では冒頭に光の世界と闇の世界の大戦争が描かれていたし、第2作でも冒頭に中世のウズベキスタン東部サマルカンドにある難攻不落の砦を攻める名将ティムールの姿が描かれる。ティムールが戦いを挑んだのは「運命のチョーク」を奪い取るためだが、さてそれは何を意味するの……？

第2作を理解するためには、第1作を含めたいくつかの前提条件を理解する必要があるが、そのためには十分わかってもない私がヘタな解説を加えるより、プレスシートに書いてある前提条件を丸写ししたほうがベター。そこで、あえてそれを丸写しすれば下記のとおりだが、さて、これでわかるかな……？

記

「人間界に生きる“異種”——それはバンパイア、狼男、魔術士、魔女など超能力を持つ者たちで光と闇に分かれ、それぞれ“光の異種”“闇の異種”と呼ばれる。数世紀の戦争の後、光の王ゲッサーと闇の王ザヴロンの間で休戦協定が結ばれ、平和を

守るため夜の番人（ナイト・ウォッチ）は闇の者を、昼の番人（デイ・ウォッチ）は光の者を互いに監視することになった。かくて千年、平和は守られ光と闇は協定のもとで無事に共存してきた。だが均衡が崩れる。12年前、“光の異種”のアントン・ゴロデツキーは闇の魔女を使って妻に呪いをかけ、胎児だった息子を殺しかけた。それで息子のイゴールは闇の側につき闇側は休戦破棄をもくろむ。だが、イゴールの悪の力に匹敵する女性が光側に出現する。2人の“偉大な異種”——その力は絶大で、2人が衝突すれば世界は崩壊する。唯一、人類を救えるのは“運命のチョーク”だった……………」

常識的には光が善、闇が悪だが……？

この映画の面白いところは、常識的には光が善、闇が悪だと考えられるが、決してそんな既成の善悪の価値観にとらわれていないこと。この作品に高い点数をつけにくいのは、ロシア人俳優の名前と顔が一致しないことが1つの理由だが、どうも俳優の顔をみているとその価値観にとらわれているように思えてしまう。

どんな役でもきちんと演じるのがプロの俳優だが、そうは言ってもそれぞれの俳優のキャラがあるから、昼向き（つまり“ナイト・ウォッチ”向き）俳優と、夜向き（つまり“デイ・ウォッチ”向き）俳優があるのでは……？ そう思っていると案の定……？

第2作の主演となる①リーダーのアントンを演ずるコンスタンチン・ハベンスキー、②研修生スヴェトラーナを演ずるマリア・ポロシナはいずれも“ナイト・ウォッチ”。また、③モスクワ所長ボリスを演ずるウラジミール・メニショフ、④オリガを演ずるガリーナ・チューニナも“ナイト・ウォッチ”。そして、この4人をみていると、どこをどうみても昼向き……？

他方、“デイ・ウォッチ”は①リーダーのザヴロンを演ずるヴィクトル・ヴェルズビツキーと②魔女アリスを演ずるジャンナ・フリスケの2人。そして、その顔つきや役割をみると、これはどうみても夜向き……？ したがって私には、どうみても、「ナイト・ウォッチ」が善玉風で、「デイ・ウォッチ」が悪玉風とみえてしまったが……？

ハイライトはモスクワの街の大破壊！

第2作のキーマンはアントンの息子でありながら、闇の異種となっているイゴール（ディマ・マルティノフ）。そうすると他方、光の異種は誰……？ また、ストーリー構成上のポイントとなる「運命のチョーク」はいったんアントンが手に入れるものの、イゴールと再会する中、イゴールがこれをこっそり持ち去ることになるから、ややこしい……？

後半にやってくるハイライトは、イゴールのバースデーパーティーの会場。単身ここに乗り込んできたのはアントン。さらにその身を案じてやってきたのがスヴェトラーナ。そして、ここでのイゴールとの対決！ 偉大な異種同士の対決によって生まれたのは、モスクワの街の大破壊というとんでもないこと。これがすごい！ まさにこの映像がこの映画のハイライトだから、それを十分お楽しみに……。しかして、その結末は……？

2008(平成20)年2月13日記